

六甲山上のシダ植物の観察と案内

舟木 冴子
(六甲山自然案内人の会)

1. 「六甲山自然案内人の会」(<http://rokkosan.gotohp.jp>) とは? (写真1)

平成14年度にNPO法人「六甲山と市民のネットワーク (RCN)」が、六甲山の自然環境保護と活性化を目指し、「県立人と自然の博物館」の協力を得て「六甲山自然案内人 入門コース」という講座を立ち上げた。その講座の修了生によるボランティア・ガイドの組織である。平成15年設立。現会員58名。

活動としては、月1回の六甲山地での自然観察会の実施、六甲山保護センター(ガイドハウス)におけるガイド(土・日・祝)、ならびに六甲山の自然に関するパンフレットの作成など。

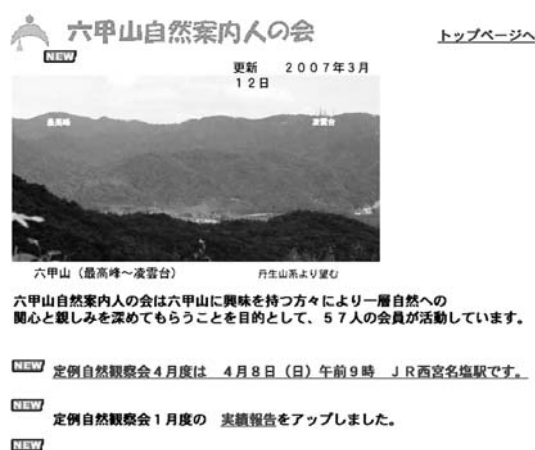


写真1

2. 平成18年12月 シダ植物の観察会と『シダかるた』

場所：六甲ケーブル・山上駅周辺 (時間：フィールド2時間半 室内約1時間)

参加者：26人

対象植物：シダ植物21種

案内と解説：舟木、舟山、長谷川

企画の主意：「シダ植物の観察から自然環境の保護を語れないか？」

地球上には約37万種の植物が生育し、そのうち被子植物は25万種、シダ植物は1万種。日本のシダ植物は約630種(92年岩槻邦男先生)があるといわれ、シダの多い国として知られる。そのうち六甲山系には166種があるといい、欧州全域の約150種を凌ぐ。困みに、このコースでは最盛期で40種以上が見られる。所要時間は普通に歩けば40分程度。1分間に1種は見られるという、欧米では考えられない頻度で出会う。

自然観察とその保護の関係を述べた「花の名を一つ知れば一つ優しくなれる」という名言がある。花の咲かないシダ植物ではあるが、名前を知ることによって自然環境の保護に繋がればと思う。

観察会の工夫 「シダかるた」

シダ植物の観察会では、同定の要素となる鱗片や包膜の形などの細かい部分の説明が多くなる。解説者の近くにおれば理解できるが、参加者が多くなると全員に理解していただくことが難しい。そこで、初心者向きの観察方法の一例として、観察後に実物標本を取り札とした「シダかるた」(写真2)という、復習と遊びを兼ねたゲームを試みた。札を取られた方に解説が終わるまで掲げていただき、疑問のある方は手にとって観察ができるという方法である(写真3)。

(例1) 読み札 イノモトソウ 軸にヒレつけ 翼(欲) 深い

解説；対象は、イノモトソウ科イノモトソウ 高さ20～60cm。常緑性。1回羽状複葉。中軸に翼がつく。胞子葉は栄養葉より長く羽片は狭い。胞子囊群は葉縁に沿ってつく。和名は「井の許草」。井戸の近くでよく見られることから。よく似たオオバノイノモトソウは中軸に翼をつけない(写真4)。

(例2) 読み札

ベニシダさん 頼ぐれないに 春が来る

解説；対象は、オンシダ科ベニシダ 高さ50～120cm 常緑性。2回羽状複葉。包膜や若葉は紅色になる。

(例3) 読み札

鱗片は 茶色で決まり ブラウンベア

解説；対象は、オンシダ科クマワラビ 高さ40～80cm 常緑性。1回羽状複葉。葉柄基部の鱗片は明るい褐色。葉脈は表面で著しく窪む。胞子囊群は葉身の上部につき、その部分は縮み夏に枯れる(写真5)。よく似たオクマワラビは葉柄下部の鱗片は黒褐色。脈はあまり窪まない。

(例4) 読み札

二岐二岐と 軸を広げて コシダかな

解説；対象は、ウラボシ科コシダ 高さ50～200cm 常緑性。葉は軸の左右に一對の羽片を出し、次々に二岐を繰り返す(写真6)。休止芽を作らない。

(例5) 読み札

カニクサは 伸ばしてみても 葉は一枚

解説；対象は、フサシダ科カニクサ 夏緑性。別名ツルシノブ。茎は蔓状。1枚の葉が巻きつきながら伸びる。葉のように見えるのは左右に二岐した羽片である。胞子囊群は裂片の切れ込みの先につく。和名の「蟹草」は子供が蟹を釣って遊んだことから。

以上5例の解説は、目視的に捉えやすい下線部分の特徴を詠んだものである。「シダかるた会」終了後に読み句の資料の問合せが数人。また、「最初は同じように見えていたが、少しは判ってきたように思う」との評価も得た。専門の方々からすれば稚拙な事例とは思いますが、一般的に「名を覚えるのも難しい」といわれるシダ植物を、「かるた」で擬人化することにより、初めての方にも、身近に感じていただければ「シダかるた」の仕掛人としてこれ以上の喜びはない。



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6